

第二章 モノ語りするマイホーム

「マイホームに「MY・・」がない

団塊パパとママの憂鬱 *アノ人とかヒカラビてる人とかいわれて

「ヒツペガシ娘」vs「ツカエナイ親父」 *総理は女性と若者に肩入れ

家庭内ホームレスの予感 *どうする家庭内孤立パパ

「わたしのモノの存在感

マドギワに「MY・チェア」を据える *即座の効用は不在時の存在感

わたしのモノ同士のモノ語り *専用品を結ぶ暮らしネット

「四季カレンダー」と「床の間春秋」 *「季節感」を活かす和風回帰

一日の課題を「八方時刻」に振り分ける *三時間ごとに一課題

目 「暮らしの知恵」を次世代に伝える

「実家依存症」といわれても *M字型でなく真一文字型の女性就労

「三同同（三世代同等同居）型」住宅 *メーカーが高齢化対応で配慮比べ

暮らしの知恵を次世代に伝える *「ジージ」を自慢するジュニア

第二章 モノ語りするマイホーム

「マイホームに「MY・・・」がない

団塊パパとママの憂鬱

マイホーム。

なんともいえず響きのいいことばである。これほどまでにやわらかい生活感を内包しえたカタカナ語を、他に探すのはむずかしい。耳にすると心安まる。

マイホーム。

繰り返しても変わらない。

それはいま高齢者となっているみなさんが、それぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年の間にその内容をつくった日本語と違っていい。

だから細部の意味合いは個人によって異なる。

よき（良き、好き、善き）もの、ひよわなもの、やわらかいものを守る城として、「マイホーム」は先行の「わが家」や「家庭」などととも、それに負けない温もりを日本語として持つに至っている。そこはかとなない温もり。

だからそのぶん「ホームレス」ということばがそこはかとなない侘びしさを伝える。

実は戦後っ子だったパパとママは、企業戦士といわれた先輩には「マイホーム主義」とから

かわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らして、ふたりの子どもを育ててきたのだった。夫婦と子どもふたりの家族が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。

その後、職場までは遠くなくても、マイホーム・パパとママは、二段ベッドで育った子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、というより子どもたちにせがまれて、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引っ越した。そういう体験をもつご家庭は少なくないだろう。人生模様はあれこれあっても、振り返ればそれが「しあわせ家族」だったのである。

そういう「核家族」のしあわせをそのまま保っておられるご家庭はここでは静かに見守ることにしよう。

いま、たしかに築ん十年の家はある。でも、わが家にいま「しあわせ家族」はない、と藤谷さんはいう。

「しあわせ家族」がない？

藤谷さんもまた、郊外の3LDKで「しあわせ家族」をめざしたひとり。そしてその成功者と見たのに、「マイホーム」の意味合いの細部に変化が生じているもよう。

なぜ？ 藤谷さんのいい分をここで聞かないわけにいかない。

人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なぎりぎりの費用を工面してマイホームを獲得して、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。長かった来し方を顧

みていま、築ん十年のマイホームの当主として、存在感の薄かったことを感じている。家もまた年を経て傷んでいるが、資材不在で、というより費用がことのほか多額で直せない。

みずからの希望を抑えても家族の希望をかなえることを優先してきた。だから藤谷家には応接セットや家具といった家族の共用品はそろっていても、自分のための専用品というのは少なく、「モノと場」に表わされる当主としての存在感が希薄なのである。しかしこのあたりのありようは、本稿のテーマからすれば確認のための横道だが、藤谷さんが特別な例とも思えない。

*アノヒトとかヒカラビてる人とかいわれて

子どもたちが自立して「エンプティ・ネスト」（空の巣）とはならず、夫婦と子どもふたりの核家族の形をなお保っている。娘と息子がふたりとも三〇をすぎても「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。サツカーならイエローカード一枚ずつといった子どもと暮らしている藤谷さんは、いま「しあわせ家族」ではないという。

藤谷さんは団塊でも最多の昭和二四年の生まれ。奥方は一つ下の「ぶらさがり団塊」である昭和二五年生まれ。結婚が遅かったため、子どもたちからは年とった両親はいやだと難題をいわれたりするが。

イエローカード一枚の娘は、「子団塊」のあおりを受けて、短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。親に結婚資金の準備がなかったか

らオヨメにいかないのだという。

そう娘にいわれてみると、たしかに外の人のためには熱心に相談にも乗り支援もしてきたが、娘の結婚について相談に乗った記憶がない。というより家庭内のことは家内にまかせてきた。

「こういう考え方はもっと高年齢の人のもので、団塊的でないようです」

藤谷さんはその件に関しては反省の色は見せるがそこだけ変える気はないようである。

下の息子は浪人はしたが、ごく普通の大学をごく普通に卒業して、就職試験を受けて勤めはじめたふつうより名の知れた輸送会社だったのに、短期でやめてしまつて家にいる。

親のひいき目でもしっかりしてきたように見えるのだが、子どもの自主性にまかせているのだが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをすすべている。「ニート化」(NEET。就業希望を有しない若年無業者)への気配もただようが、時折り出かけて「職さがし」はしている。

藤谷さんが毎日家に居るようになって、娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、ごくふつうに両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といっていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親には面とむかつて「キミ、元気かね？」とか「オマエは・・・」などと軽くあしらわれていると感じることがある。

父親の存在など意識せずに気ままにすごしている。

「この家はわたしが名義人なのだ」

というのも愚かしい。

壁面に娘が貼ったままの「のりか」（藤原紀香）のポスターほどには、底値までさがった土地の築ん十年という家の壁に存在感があるわけではない。

「ヒツペガシ娘」 vs 「ツカエナイ親父」

「高齢者は資産を塩漬けにしているのです」

と、カネ儲けに抜け目がないと噂される経済学者が、TV番組で、経済の停滞はそれが理由ですと言いつ切る。

周りにだれもない。藤谷さんは身を乗り出してTVに向かって抗議する。

「資産を塩漬け？ バカいうなよ。塩漬けにできる資産などどこにもないし、わが家ではとくに娘に強奪に近い形でヒツペガシ（資産移譲）されているというのに」

高齢者の「平均貯蓄額」が二三七〇万円という解説がはいる。暮らし向きに心配のない人が七割を超えると若いアナウンサーがいう。こんな話題を同居の娘と息子に聞かせたくない。数字にいつわりはないのだとしても、将来が不安で貯蓄をしたというのだから、貯蓄の多さより、将来展望をもって貯蓄など考えず生きられるような国づくりを話題にすべきではないのか。

入社のときから信頼していた会社の先輩は、

「ほどほどの赤字人生が男子の美学だよ」

と、貯蓄など考えずにきっぱりといい、

「きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするものだ」と言い切って飄々としていた。

藤谷さんは後輩として、赤字まではともかくゼロに始まってゼロに終わる人生を納得する男子の覚悟ぐらいはしてきた。

このあたりの考え方は、将来が不安で貯蓄をしたという「純正団塊の世代」の考え方とは違うように感じる。だから貯蓄とはいえないほどの貯蓄しかないのを、娘や息子には申し訳なく思っている。思ってはいるがわたしはわたしだからしかたがない。

それにしても「下流老人」「老後破産」とはなんということをいうのか。

戦禍からの復興の時期に、貯蓄など考えていられない。みんなが等しく豊かになるために分けあい助け合ってきた。そういう生き方をしてきた善意の人たちに対して失礼ではないか、と藤谷さんは憤慨する。

しごととはほどほどにして、家にFAXを置かず、確定申告で税金逃がれをし、貯蓄にいそしんでいた同じ団塊Mの顔が浮かぶ。

「あいつが人生の勝者か」

藤谷さんはしごととはとことんやってきたと自負しているし、まだやるつもりでいる。

しかし高齢者のしごとは探すととなると少ないという藤谷さんの話を聴きながら、ここにも二

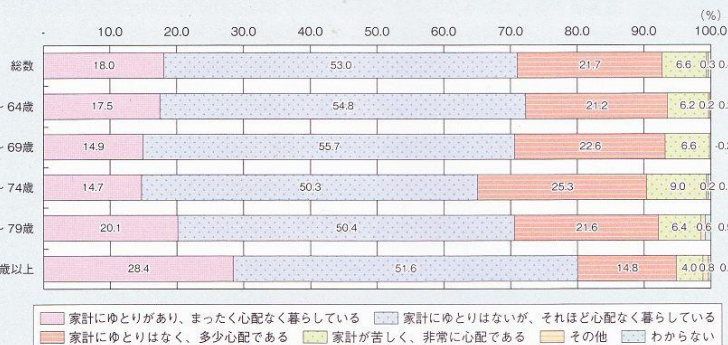
○年の国の対策の延滞が露呈しているように思う。

一方で女性の登用は「ダイバーシティ」（多様性）と呼ばれて多様に用意されている。女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるとはやしたてるのはいいのだが、どれほどの若い女性が実力で仕事をし、自分の実力（かせぎ）で暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそいつものディオールのパーティー・ドレスに着替えて、「変衣変性」する娘の姿をみながら、藤谷さんは際限なしの「女性化」に懸念をもっているのである。親の育て方がどうのではなく、これが風潮なのだからとやかくいっても仕方がないとはわかっているが。

＊総理は女性と若者に肩入れ

娘たちを「時代の花」として擁護し、女性の活力に期待する立場からは無条件に、両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じての家庭内ヒツペガシは当然と考えている。

図1-2-3 高齢者の暮らし向き



資料：内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」（平成23年）
 (注) 対象は60歳以上の男女

教育費一五〇〇万円まで無税譲渡の政策を見逃がさない。それなら目前で必要としている娘たちの社会教育費としてまわすべきだという論法である。こんな風潮に耐えられる家庭はどれほどあるのだろうか。

女性への追い風は経済界から吹いてくる。

毎年、「男女格差報告」についてのダボス会議の報告で、日本はこれまで長く一〇〇位以下という女性活用の低位置が放置されてきた。それが急に経団連や同友会までが女性の登用を言いだし、「ダイバーシティの推進」としてすすめる。

そして安倍総理もことあれば女性と若者の成長力に期待し、女性重視を打ち出している。女に生まれてよかった。笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面は、すでにどのチャンネルもどの番組も、はしやぎまわる女性たちで占められている。若づくりの男たちがわき役で、高齢者は違和感があつて出られない。

藤谷さんは職場の雰囲気をごんなふう想像する。

「団塊の世代」の男たちがいなくなつてしまった職場は、残った男たちでは頼りなくてもたない。そこで女性社員が実力以上にはしゃいでくれたほうが華やかでいい。経営側の見積りにはそんなところもあるのだろう。

いまの職場では意に沿わないと「ツカエナイ上司！」になる。

家では人並みに応じられないと「ツカエナイ親！」としてあしらわれる。

「お前こそヒツペガシ娘！」と、いつてしまえば悲しい花いちもんめである。

いい返せないのである。藤谷さんばかりか、うかうかしていると心優しい高齢者がみんな居場所もない、おカネもないになりかねないのである。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに、年輪を経て熟成した生活感性で渋く輝いているはずだった高齢者が、居場所もおカネもなくなるとは何たる仕打ち！

職場ではIT音痴と揶揄され、はてはリストラの対象ともなった。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見られた「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、藤谷さんには、戦後すぐろくの「上がり」に近かったところから「ふりだし」へと戻って行くように思えてくる。

だれもが安心のできる老後どころではないではないか。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」の予感

もう少しし、二一世紀オリジナルへの藤谷さんの負の感想を聞いてもらいたい。

何としたことか、わが家において、「ホームレス」とさほど遠くない侘びしきを感じている戦後っ子パパが増えているという。

「下流老人」や「老後破産」ということばが先回りして待っている。

パパが過ごすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでもなかったのに気づかなかっただけのこと。

テレビのチャンネル権はもととない。というより見るに値する番組がない。ラジオのほうは深夜にふとスイッチをいれて、ほっとするいい人の話や音楽とめぐりあうことがあるが。

クルマは一台しかないから行く先が違えば使えない。というより子どもたちのようにあちこち行く場所がない。しかし車検・整備・ガソリン・JAF費用まですべて親持ちである。

食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。おでんよりスープ、魚より肉料理。自分では急に作りようがないから外食時代に好きだったものも食べられない。これがつらい。

聞けばだれもが同様で、会社でのしごとがなくなつて、家にも居場所がなくなつて、「ホームレス」気分になる。といって屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか、公共図書館か、パチンコ屋の休憩室くらい。だからウオーキングでいらいらを解消するしかない。

二〇世紀のよき「マイホーム」はほんとうに無事なのだろうか？

老後を子どもに期待しないという高齢者の増加が「世代交流」の必要性の底を流れているとしたら、藤谷さんは特別の例ではないのかもしれない。

屋外に「ステージ」がない原因は社会のしくみにあるといってみても、どうしたらいいのか解らない。わが家のなかにさえ「居場所」がなくなるのだから。

このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かっていると感じられる暮らしは招き寄せようもない。

*どうする家庭内孤立パバ

藤谷さんは改めてじっくりわが家の中を見直して見る。
本だなの本が動いていない。

家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の中古品だ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は百均（DAISO）やスーパーものが多くなった。

シャツはユニクロ（UNIQLO）かアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物にはブランド品もあって、ルイ・ヴィトン（LOUIS VUITTON）やプラダ（PRADA）やディオール（Dior）やシャネル（CHANEL）などは藤谷さんにもわかる。しかしスーパー品とのアンバランスに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

藤谷さんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ（OMEGA 終わりの意）の腕時計だけ。家族を優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないかとさえ思う。

気がつくくと、少ない自分のものが孤立して見えてくる。

家のなかにもっと高齢期の専用品を増やさねば。

□ わたしのモノの存在感

マドギワに「MY・チェア」を据える

前の項の藤谷さんはリスクを負わない着実なタイプなだけに現状への解決にふみきれない。

だが、同年の中村さんは可能だとみれば挑んでみるタイプである。企業側の海外進出の事情で同じころリストラに合ったときに、給料は度外視して国内でやれることがあった同業他社に移った。と同時に高齢期の暮らしを考えて「家庭内リストラ」にも着手した。

子どもふたりのうち、息子は会社の出張で東南アジアに出ているが、娘の方は当然のようにして居座っている。そんな中村家のようなすを覗いてみよう。

リビング・ルームの一面、ネコの額ほどの庭と室内の双方が見渡せるマドギワに、特別席「シニア・スペシャル・シート」を据えている。会社でもマドギワだったし家でもマドギワと、居心地を合わせることにして。

まずは旅先で記念に入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。文字盤が気に入っているスイス製の置き時計をサイドボードの隅に。

中村さんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢期人生をゆだねる「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。含みというのは「不在の在」としての存在感。重量感より意匠センスより何より座り心地を優先する。いくなればわが家の「玉座」か「師

子座」か「座禅座」かである。

かつてインドでシヤカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのだから、「SSシート」として大切に扱うことにしたい。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日を静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。わが国には古来坐して過ごす習慣がなかったので、「MY・チェア」がない。そこで、高齢期人生への投資をする。

*即座の効用は不在時の存在感

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そう
なって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」

というのは、中村さんがマイホームを建てたころの有名建築家の提言で、
まことにその通りと思ったものの、家族思いの当主としてはそこまでの自
己主張をしなかった。老い先長い高齢期を通じて使い込むことによつて座
り心地を熟成させてゆく「MY・チェア」。

中村さんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴
史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらして、見るからによく、
座り心地もよさそうだという。



最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製リクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅がある。

中村さんは調べの段階で、思い悩んだ末になんども座ってみてドイツ製スツールにした。

長い高齢期を安らいで過ごす拠点が「MY・チェア」なのだから、これといったイスと出会ったら思い切って投資（浪費）をすること。初恋の人を失った思いを二度もすることはない。還暦の祝いでもいいし、古希でも遅くはないが。

一日の活動を終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとときり一日をふりかえる。「さて」と気を引き締めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのだ。

どっしり座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

このあたりの選択と実行は挑戦派の中村さんから学ぶとしよう。

わたしのモノ同士のモノ語り

意識して高齢期のモノのありようを考えることは、これまでになかった「家庭内高齢化リス

トラ」のはじまりであり、新しい歴史がはじまる原点である。

個人にとつても、企業にとつても、社会にとつても。

家庭内でモノが動けば、企業が動く。企業人がそこに気づいてわが社の高齢化製品を考えるきっかけになる。小回りのきく中小企業が保持する技術が動く。それが「高齢化経済」への突破口になる。需要側からの強い要請がないかぎり、いま企業はリスクを負っては動かない。

中村さんのような高齢者がさまざまな用品を求めて要請を出すことで、「足踏み」していた中小企業が動く。動かなければマーケットを他に奪われることになるからだ。

わが国の高齢者が、百均商品でがまんしてきた日用品を、生活感性にあった優良な国産品に差し替えるチャンスになる。モノが良く安心して使えて長持ちすれば、やや高でもユーザーは家庭内の「高齢化コア用品」として入手する。

候補はいろいろ。

中村さんはデジタル化したシャッター音と手触りの感触に思いの残る高級一眼カメラまで手元に置いている。古物ではないという生活感覚で。部品を揃えるのに一苦労するがオーディオの愛用機器が混じっている。

楽器。碁・将棋盤や釣り具セットはある。ゴルフはやらない。手仕事に感じ入っている碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンティーク（西洋古美術品）。日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車などのミニチュア。

素朴な木製アフロ・グッズ・けっこうあるものだ。手芸品もある。

それにあちらこちらに散在していたのを全員集合！をかけてあつめた七〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれくらいで十分だという。

どれもお気に入り「わたしのモノ」であり「高齢化コア用品」の候補だが、その中から五〇七点を選り出して配置し、時折り並べ替えをする。暮らしの基点になる「MY・チェア」から動いて出会える範囲に配置すればいいとのこと。

家庭内に大道具・小道具による「高齢期ステージ」が立ち上がる。

*専用用品を結ぶ暮らしネット

地球儀なんか意外にもしろいのではないか。

極東アジアにある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角にあって、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋大国」（領海・排他的経済水域では世界九位）であることを宇宙飛行士の視点で納得することができる。

極東（FE）の「小日本（シャオ・リーベン、領土では六一位）」であるとともに、パン・パシフィック（PP）の「海洋大国」であるという多重性を理解することで快い自信を与えてくれる。

本ものの夢の旅は船旅にある。タンカーも必要だが、サービスを徹底



した世界有数の中型客船を太平洋航路に数多く就航させるのは海洋国の役目である。船中で人びとと出会いながら日本と日本製品の優良なところを多いに話題にすればいい。太平洋諸国との友好も進む。

海洋大国化は世紀をかける事業となる。

家庭内の話に戻ろう。

いまや手にいれるのは困難な貴重種だというが、蝶の皇帝「テングアゲハ」なら華麗に舞う姿を思うだけでいい。胡蝶に「物化」して舞ったという壮年の莊子の「周（莊子の名）の夢に胡蝶たるか、胡蝶の夢に周たるか」という「胡蝶の夢」は味わって損はない。

旨し「天の美祿」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利。掌の上でのぬくもりは触れてなまめかしい）でもいい。

もちろん親ゆずりの骨董品でもあれば、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」の候補はいくらでもある。なければレプリカを置いてホンモノを探し出すこととなる。レプリカの現物化が重要なのは、みんながそれを期待し、企業の生産現場に声がとどけば、「高齢社会」のモノを豊かにする内需の契機となるからだ。

ユーザーとメーカーの情報をつなぐネット企業もさかんになる。

ここで「わたしのモノ」として終生にわたって愛用できるような「高齢者むけ優良品」を創り出してくれる全国各地の熟年熟練技術者のみなさんにエールを送って先にいくとしよう。で

き上がるのに何か月も待たれるようなスグレモノの少量生産でいい。

こうしていくつかの「高齢化コア用品」とそれをめぐるいくつもの季節小物、それに奥方の「わたしのモノ」の応援をえて配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママの存在感を伝えるしかけが見えてくる。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強める。

同じ機能のモノでも親子に較差（格差ではない）があつていい。モノによる「家庭内の一品多様化」はモノを通じた親子語りのはじまりを意味する。

外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた高齢社会活動家とはいえない。

「四季カレンダー」と「床の間春秋」

木下さんは定年待ちの高齢者のひとり。

「改正高年齢者雇用安定法」（二〇一三年四月）によって会社の定年は六五歳まで延びたが、それで新たな心躍るしごとが増えたわけではないし、何であれこのまま定年まできちつと与えられたしごとをこなして過ごすつもりでいる。しごとをつくれなのは会社のほうで、きちつとした高齢社員のひとりである木下さんに、ここでは社内でのことをとやかくは聞かない。しごと

との外で心躍ることがあるという木下さんのしごとの外のことを聞いてみたい。

「心躍るといって大げさですが、季節ごとの催しや、旬の料理づくりや、俳句仲間との吟行や、いろいろですよ」

ここでの木下さんへのわたしの関心は、「一年」ではなく「一季」を基本として暮らしている人だからだ。前章の藤谷さん、中村さんの一歩先をゆく「四季丈人」なのである。

*「四季カレンダー」

居間には重厚なサクラの机にそろいの「MY・チェア」もある。部屋の真ん中には据え置き
のヒノキのテーブル。「四季丈人」の木下さんは「MY・チェア」に座って眺められる壁面に、
ビジュアルのしやれた「四季カレンダー」を掛けている。季節ごとの三カ月のもので、春なら
三・四・五月、夏なら六・七・八月というように、四季それぞれ三カ月の日付が視野の中に呼
び出されている。

木下さんは淡々と語る。

「年末恒例の東京銀座・伊東屋の「カレンダー展」などをのぞいても、「四季カレンダー」と称
するものはありますが、実際に四季ごと三カ月の九〇日間のものは見かけないですね。あるの
でしょうがわたしの眼につくほどにはない」

と木下さんとわが「四季カレンダー」を見やりながらいう。

お茶の会とかお花の会とか季節の移ろいに寄り添うような暮らしをしている人びとから需要

はあるはずだし、身近にあつていい暦なのだから、いずれはカレンダー会社が競って制作する「季節しごと」になる時がくるはずだからと、あわてず騒がず待っているというのが、木下さんのひそかな希いなのだという。

「四季カレンダー」はカレンダー展で探しても見当たらないから、例年入手している馴染みの写真家のカレンダーを、四季ごとに三カ月三枚を貼り合わせて仕立てているのだという。

新年・冬は前年一二月く本年二月、春は三月く五月、夏は六月く八月、秋は九月く十一月、次の新年・冬は一二月く次年二月（まだない）である。なるほど、よく見ると月と月の間を貼っていて手製であるのがわかるが、離れてみるかぎり「四季カレンダー」になっている。

季節行事や旧暦は記されているから、「四季」はカレンダー上に鮮明に表現されている。サイペンの赤マルは、参加する催事や「吟行日」である。

*「季節小物」あれこれ

「四季」を取り込む小物や仕掛けを、木下さんは「MY・チェア」に座って眺められるほどよい位置にいくつか配している。年四回の季節はじめにおこなうモノの配置の「季節替え」を中掃除といって楽しんでいる。三カ月の新しい季節を待つて迎えて送る季節行事である。

花鉢、紋のれん、玉すだれ、星座図、雛人形、五月人形、鯉のぼり、扇絵、風鈴、蚊やり豚、菊人形、丸火鉢・・・といった「季節小物」の置物や飾り物



を入れ替えたり移動したりする。季節の移ろいに応じて、住いにかんする春もの、夏もの、秋もの、冬ものを目立たせるとともに、衣・食それぞれの四季の変化も楽しんでいる。

*「季節感」を活かす和風回帰

「茶道や華道も、そろそろ男性回帰の時期ではないですか」

木下さんは持論を述べたそうである。

「和風回帰のキイは男性による回帰です」

茶道も華道もそうだが、文化勃興期の変容は男性が主導する。けれども完成期以降は形式美として女性が静かに支えるという。木下さんは茶道も華道も双方とも奥さんより手が上というのが自慢である。

和装もまたしかりで、これまで主として女性の儀式用の盛装として、技術も意匠も素材も職人によって支えられ保存されてきたが、いまや「季節感と地方性を享受する高齢男性」の登場によって、「モダン変容」をする時期にあると、わが身に引き寄せて熱心にモノ語る。

「季節感」を活かす和風回帰をリードするのは男性だというのである。

*「床の間春秋」

木下さんはこんな指摘もする。

「どこのお宅でも四季を取り込むために先人が残してくれた仕掛けが活かされていますね」

と木下さんがいう仕掛けというのは、「床の間」のことである。和風建築のお宅にはかならず和室に床の間がある。

ところが冷暖房機器があつて季節感がない部屋なので、軸は年中かけっぱなしの一幅だけになる。これではせつかくの「床」が動かずに惜しい。というより無いに等しい。季節の通風を心がけている木下さんとこの床の間は、花の軸を「梅」「牡丹」「蓮」「菊」の四幅をそろえて「四季花軸」としているという。

まずは春秋一幅ずつそろえれば「床の間春秋」が楽しめる。それでも床の間は季節を感じて動くことになる。有名画家のものは高価だから、習作期の画家のものや素人画家の力作に魅力がある。

「ぶんぶんクーラーを回して密室で過ごす無季節、無機質な「常春」指向では「床の間春秋」を楽しめるはずがない。そんな部屋で過ごす文化人なんて失格ですよ」
そこまでいいですか、木下さん。

もうひとつ、木下さんお気に入りの「エイジド用品」がある。

テックタック・テックタックと振り子が行き来するウルゴスの古時計。これは形もよく据えられた部屋の一面で生きている。静かな室内でも、あるともなくある柔らかい音がいい。いわれるまでは気づかないほど。



百寿期の「おおきなつぼの古時計」とまではいかないが、形も数字の表現にも洋風古淡の味わいがある古時計である。振り子の音はどこまでも柔らかく音楽の領域に達している。

「風鈴がうるさいなんていわれちゃうのは、風鈴のほうがいけない。現代の日本の製品は音に鈍感すぎる。あるとも知れない音でいい。カメラのシャッターのシャカシャカは最低。記者会見の時のあれがいいという神経がわからない。製品哲学のあるライカにはありえないですね」あのシャカシャカ音が忘れられないという前章の中村さんを思い出したが、これはここでは口にできない。

古時計の遅れは気がついたところで直すのだという。

傍らにデジタル時計も置いていて、

「二もとの梅に遅速を愛す哉、です」

などと、蕪村の句を挟みながら、木下さんは新旧の時計の遅速をもまた楽しんでいる。

一日の課題を「八方時刻」に振り分ける

だれもが何の疑いもなくさしたる不具合もなく、一日を二四(時間)に刻んですごしている。一時間の体感はかなり正確である。日ごろ、テレビの一時番組や三〇分ドラマや十五分ニュースや三分コマーシャルに接しているので、これらの長さを体内時計がうまく合算して、日々をつつがなくすごしている。

時計はデジタルが多くなったが、長短の針や数字に味わいがあるアナログ時計も二つや三つはあっていい。十二時、三時、六時、九時の三時間ごとの刻みは目に焼き付いて鮮明に時刻を示してくれる。

そこでここではそれを活かして、三時間ずつ八つの刻みを意識した「八方時刻」を、時間の多重標準としている西岡さんの暮らし方を推奨したい。

「八方時刻」というのは、次のように一日を八区にわけたものである。

更（ふけ）　〇～三時

明け方　　三～六時

朝方　　六～九時

午前・昼前　九～一二時

午後・昼過ぎ　一二～一五時

夕方　　一五～一八時

晩方　　一八～二一時

夜　　二一～二四時

一日を八区（八方）に分けることで、区ごとの印象が明解になり、それとともに行事や活動を

もまた明解な記憶を残してくれることになる。

*三時間」とに一課題

「更」は五更まであって三更から日替わりだが、夜更けや深更として日替わりの感覚があるので、それをはじめの一区に据える。

二区の「明け方」と三区の「朝方」には異論がないだろう。正午をはさんで四区の「午前・昼前」と五区の「午後・昼過ぎ」そして六区の「夕方」を迎える。

さて七区（午後六時〜九時）。

ここは呼称が問題で、気象庁は天気予報で「宵のうち」と呼んでいたのを、人によって捉え方が違うからという理由で、二〇〇七年四月からは「夜のはじめごろ」に変更したが、収まりがよくない。そこで本稿では朝昼晩としての実績をもつ「晩方」を七区に据えた。そのあとが一日の終わりである八区の「夜」である。

明日にメインの行事があれば、前もって〇区に据えておく。日々を三時間ごとの八区に刻んで、そこで出合う「モノ」や「場所」をしっかりと配置して過ごす。

たとえば、西岡さんの一日はこんなふうになる。

某月某日。「朝方」には散歩をしてから孫といっしょに朝食をして朝刊を読む。「昼まえ」には米寿を迎えたS先生にお祝いの手紙を書き、Tさんに電話。「昼すぎ」には軽い昼食をす

ませて郵便局と図書館へ。「夕方」にはYさんを訪ねて話をし、日用の買い物あと夕刊を読み、「晩方」には晩飯をすませてTVニュースをみ、「夜」にはEさんへメールと読書。夜更かしはしない。

その間、三度の食事で「健康」に留意し、読書（朗読がいい）や会話で「認知症」を制し、よく歩くことと雑事で「行動力」を保持して過ごすことで、本稿の「体・志・行」三元カテゴリーに配慮しながらバランスよく暮らそうという趣旨と重なる。

「八方人生」には、日々を着実に刻んでいるという充足が感じられる。「八方美人」ほど目立ちはないが、西岡さんのような「八方丈人」には生活実感がある。

目 「暮らしの知恵」を次世代に伝える

「実家依存症」といわれても

モノ語りするマイホームの行き着くところは住宅そのものにある。

孫はかぎりなくかわいい。

子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、祖父母としてわが家の三代目を養育する場を用意することになる。

いろいろやりくりして多くの家庭が「近居」や敷地内「隣居」や「同居」を成立させている。

「近居」の場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれるこ

とはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。

幼い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもたらししてくれる。そこで出合いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。

きちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっているけれども、現状ではこのあたりが標準的「しあわせ家族」となっている。

ここでは「近居」がうまく機能しているご家族のしあわせを祈りつつ、減りつづけてきた「三世代同居住宅」をめざす渡辺さんの課題を見てみたい。

三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまふからだ。国の骨格をつくっている家庭の絆を強くし、「わが家三代の暮らしの知恵」を子孫に伝えるには、どうしても必要な住環境だからである。

渡辺さんも中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをして、団地よりやや広い都市郊外のこの一戸建住宅を購入して転居した。それでも「二世代住宅」が精いっぱい、このままでは「二世帯住宅」にはならない。

二人の子どもがそれぞれに自立した後は、夫婦ふたりで暮らしている。娘の卒業記念に地元小学校が分けてくれた梅の若木を庭に植えたときのこと。下の息子の野球の応援で甲子園までいったこと。作文や家庭科の手編みを手伝ったこと。恋人の確認に同道したときのこと……。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるが、子育て期のいくつもの困難をクリア

してきた父として母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家はなお娘にとってはひそかな生活戦略にかかわるスペースでもある。

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%までが同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台になっている。そんなことはないと思うのだが、諸外国と比べて親子の接触は少ないという。

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

渡辺さんの長女は第一子を産んだあと、二五歳までの予定だった第二子の出産期をはずすとあとは先延ばしして三〇歳代に。これが一般的だとすると、少子化に歯止めをかけようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか二人目の子どもをと覚悟はきめても、不安定な夫婦の収入では将来、養育・教育費が重圧になるのは見えている。

公立でも約一〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるというし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつものばかり。そこで、「カアさん力を借して」ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。

* M字型でなく真一文字型の女性就労

国はこれまで夫婦ふたりによる子育てを「エンゼル・プラン」（文部、厚生、労働、建設の四

大臣合意により平成六年一二月に策定）以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対象にして養育のしごとをしている専門職の側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていない。

みなさんは驚いてはいけない。いまでも「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では、「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていないのである。これでは孫にわが家三代の暮らしの知恵をと考えても宙に浮いてしまうのではないか。

若いふたりによる大都市での子育てと地方での実家での子育てでは異なっていると思うのだが、さなざまな事情が重なってあつて、「祖父母」は孫育てから排除されている。しかし地域の次世代育成では必要な人材となる。

「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦が少なからずいる。

渡辺家では、母が子育てに力を貸し、娘がしごとを続けながら第二子の出産を可能にするこ
とにした。かつて専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、M字型就業を避けて真一文
字型の就業により専業課長でありたい娘による「三世代同居」へのUターンを選択することに
したのである。

「三同居（三世代同居）型」住宅

大都市近郊に住む渡辺さん夫妻は、近居して子育て中の娘家族からの要望もあつて、「二世

帯三世代同居」型の住居への建て替えを決めている。

覚悟という大げさに聞こえるが、目をつむっても、どこに何があるかまでが分かっている住宅から、新たな暮らしへの転換は、やはり覚悟がいるという。地方のお宅なら、敷地内での「隣居」が可能だろうが、都市郊外住宅の場合は残念であるが、そこまでの土地の余裕がない。だから建て替えになる。

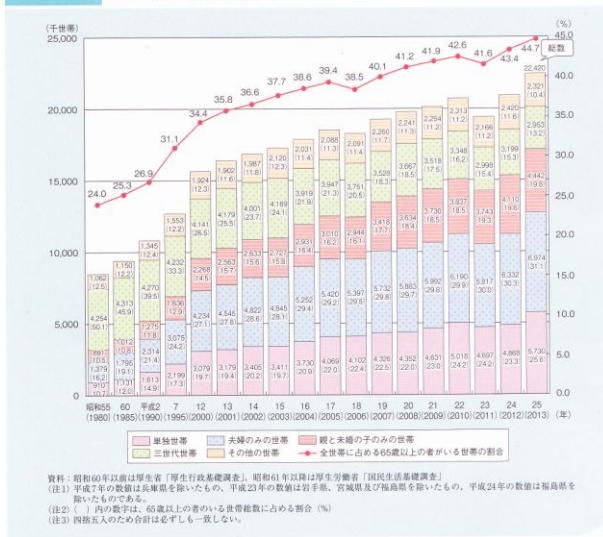
すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。そこで渡辺さんは訪問会に参加してみた。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居だから外形も安定している。樹木も育っていて、大ぶりに枝を広げたサクラも庭隅にあつて、それを囲むようにしてL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

渡辺さんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻のほかには一人っ子の高校生の娘と義母の四大家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘

図1-2-1 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者の割合



の部屋と広いリビング。一角に書斎もあって、「マスオさん」（サザエさんのオムコさん）タイプの男性として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。

上下階の雰囲気の違いを感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからだろう。「三世代同居型」住宅として申し分ないが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったという。

*メーカーが高齢化対応で配慮比べ

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省）が出て二〇年になる。この年の一月に「高齢社会対策基本法」が成立した。「基本法」から二〇年、住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもっとも進んでいる業界である。「失われなかった二〇年」といっていいほどだ。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「二世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの二世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、共用スペースのつくりつけが「ミドル＋ジュニア」主体に寄りがちになっている。だから「三世代型」住宅とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられる。ここにも高齢期が「余生」であると

いう旧来の高齢者意識が濃く反映されている。これではほんとうの高齢化時代の三世代平等住宅とはいえない。

「人生の第三期」の主役として、これから二〇年もの長い高齢期を「円熟人生」の主役としてゆったりと暮らす家ではない、と渡辺さんは気づいている。

暮らしの知恵を次世代に伝える

ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母であるバアバちゃんの出番である。ア的位置が微妙なところ。ジージもそう。孫であっても、ー（ひっぱり）の位置が下になると顔つきがかわしくなる。

孫の日々の成長につきあいながら、わが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての居間（共有スペース）。そこを中心にして周りへ「三世代」のプライベート・スペース。孫と接点をもつ居間への動線。娘と共有する台所への動線。実質的主人であるバアバちゃんの工夫を織り込んだ「三世代住居」を実現すべく渡辺家は設計にはいつている。いまは三世代が揃っていないくとも、三世代が常に等しく扱われる同居住宅が「三世代同同居型」住宅（長いので「三同同居住宅」と呼ぶ）である。

「家族みんな考えていろいろ解決することができますから」

と、渡辺さん夫妻は親・子・孫三代が出くわすさまざまな場面での処理にも気をくばる。

「三同同型住宅」を実現できる渡辺家は、「超」がつくほどの「しあわせ家族」だが、国の骨格になる家族として多くあってほしいケースであり、優遇措置を講じても地方創生を担う三世代のための居場所として増やすことだ。国の骨格を形づくる強くてたおやかな国民性は、三世代あるいは四世代同居の家族によって培われ継承されていくのだから。

「三同同型住宅」の標準化のために、国や自治体は優遇措置をおこない、建設業者はノウハウを蓄積し、企業は女性社員の地元勤務型キャリアの設置とともに、子育て期の女性が能力を十分に発揮できるよう支援する。地域と家族が総出で次世代を育てることとなる。

女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトというM字型就業にかわって、高年齢まで真一文字型にしごとに集中できる女性人材として処遇されるようになる。

*「ジージ」を自慢するジュニア

そして次世代に、母系のつながりを有効に活かしながら「わが家の暮らしの知恵」を伝えることが可能になる。母と娘がやりとりする継続性のあ
る生活感、祖父母と接することによってもたらされる孫世代へのメリット
には計り知れないものがある。父と母はともに充実してしごとに向かい、
祖父母は家の内でも外でも孫たちの成長を温かく見守る。

「うちのジージがね」



といって、ジージから教わった暮らしの知恵や悪知恵を自慢するジュニアが三分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。

　　高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。

　　これもまた「高齢社会」を構築するとともに、国の骨格を強くするために重要な「三ステータス」の一環といえるのではないか。